

(資料)

A 県内の保健医療福祉分野の教員における模擬患者の教育活用とニーズの実態

新藤裕治¹⁾ 早出春美¹⁾ 本間隆之¹⁾ 山本奈央¹⁾ 芳賀了¹⁾

要 旨

【目的】

A 県内の保健医療福祉分野の教員における模擬患者 (Simulated Patient ; 以下 SP) の教育活用に対する状況およびニーズの実態を明らかにする。

【方法】

A 県内の保健医療福祉分野の高等教育機関の専任教員 45 名に、SP の教育活用状況とニーズについて Web によるアンケート調査を実施した。分析は看護学および看護学以外の分野に分け、関連を Fisher の正確確率検定を用い比較した。

【結果・考察】

SP を知っていると回答した者は、31 名 (68.9%)、教育活用経験は 6 名 (13.3%) で「ロールプレイ」2 名 (看護学)、「OSCE」3 名 (医学) あった。SP ではない患者役を用いている者は 21 名 (46.7%)、その中で SP を活用・検討希望している者は 10 名であった。SP の活用場面と求める能力では、看護学分野では、場面は「ロールプレイ」、能力は「フィードバック」が有意に高かった ($p < .05$)。SP を用いた教育効果は高いため、今後 A 県内において SP を養成・教育活用促進のためには、SP の周知と、本研究結果を活かしつつさらに各分野の詳細なニーズの把握に努めていくことが重要である。

キーワード : 模擬患者 教育活用 ニーズ 保健医療福祉分野

I. 背景

現在の日本は、高齢化や新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて社会情勢が大きく変化し、それに伴い国民の健康の価値観も変化している。健康を支援する保健医療福祉分野の専門職者は、常に変化する国民の健康へのニーズに対応していくことが求められる。そして、保健医療福祉分野の人材を養成する高等教育機関は、社会のニーズに応える人材育成のため資質や能力を向上させるべく、教育内容を充実し続けていく必要がある。

看護学分野は、看護実践能力の育成に向け「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」(文部科学省, 2017) や「看護学士課程教育におけるコア・コンピテンシーと卒業時到達目標」(日本看護系大学協議会, 2018) といった社会に応じた看護師の資質や能力向上の内容を明文化し、より実践能力向上に寄与する教育内容の充実に各大学が取り組んでいる。文

部科学省の大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会(文部科学省, 2019)では、看護職者の高い看護実践能力に不可欠な臨床判断力の修得への期待は高く、教育方法についてはシミュレーション教育の導入等、アクティブラーニングへの積極的な転換の必要性を述べている。これは、臨地実習に関して患者選定が難しいことや看護場面の見学にとどまっていること、臨地での時間が短く体験機会が少ない等の環境面の課題もあるが、大学教育における演習と実習の有機的連動をより意識した教育の在り方の検討でもある。また、医学分野では、知識や総合的理解度の評価とした CBT (computer based testing) と実践能力評価である客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination ; 以下 OSCE) からなる共用試験が 2023 年度から公的化される。これは、医学分野において、医学教育モデル・コア・カリキュラムのコミュニケーション能力とし

受付日 : 2023 年 6 月 9 日 受理日 : 2023 年 8 月 8 日

1) 山梨県立大学看護学部

て関係性を築き、安全で質の高い医療を実践することが挙げられていることから、コミュニケーション能力の向上や面接スキルに対する教育が重要視されている。

このような教育内容は時代とともに変化しているが、対人サービスを基本とする保健医療福祉分野では、より対人との実践的な能力向上への教育の展開が求められている。

現在、保健医療福祉分野における能力向上に向けた教育方法は、シナリオやSPを用いたシミュレーション、実践能力評価であるOSCEなど様々な方法が用いられている(松谷ら, 2010)。中でもSPの教育への活用は、医学部や薬学部での医療コミュニケーション教育における導入から始まり、看護基礎教育では、1984年にSPの活用が報告された後、2000年以降には研究報告も大幅に増え(清水ら, 2008)、中村ら(2016)の研究において回答のあった84校中53%が教育に活用している。そして、看護基礎教育へのSPの活用は、学生にとって看護過程の展開における導入時には対象をイメージ化し、看護者としての看護観が芽生えるきっかけとなる(福岡ら, 2006)。また、OSCEやシミュレーション演習への参加は、臨地実習のようなリアルな感覚から患者をイメージしやすく、自己課題の明確化や学習の内発的動機付けとなり、さらにコミュニケーション能力の形成等(渡邊ら, 2016)、様々な効果が明らかにされている。

こうしたSPの教育への活用は、理学療法士(佐藤, 2008)や管理栄養士(佐藤ら, 2011)、歯科衛生士(長谷ら, 2021)といった医療分野のみならず、社会福祉士(巻ら, 2014)や介護福祉士(池森ら, 2018)などの福祉分野にも導入されており、保健医療福祉分野全体に波及している。

SPは、ある疾患の患者の持つあらゆる特徴を可能な限り模擬するよう特訓を受けた健康人(大滝, 1993)であり、生きた教材として、患者のもつあらゆる特徴、即ち単に病歴や身体所見にとどまらず、病人特有の態度や心理的、感情的側面に至るまでを物理的に可能な限りを尽くして、完全に模倣するように訓練を受けた健康人(植村, 1998)とされている。つまり、教育においてSPを活用するためには、まずSPとしての能力を修得できるよう養成する必要がある。SPの養成は、各分野の教育ニーズに応じた養成プログラムが鍵となる。現在医学や歯学薬学での教育は、医療面接やOSCEへのニーズが

あり、対応した標準SP養成のカリキュラム(志村ら, 2012)が策定されている。しかしながら、看護学分野は、看護実践能力を向上できるよう、各分野が医学教育の養成プログラムに準ずるだけでなく、独自の養成カリキュラムを用いていることが多く(中村, 2016)、保健分野や福祉分野での独自の養成カリキュラムはない。保健医療福祉分野で実践能力を向上する教育を展開活躍するためには、分野の特性や演習の目的に対応できるSPを養成する必要がある。また、看護分野におけるSPの教育活用においては、綿密な授業設計と教育に即したシナリオの選定やSPとの打ち合わせなどの教員の準備の負担(渡邊, 2016)や、教員のファシリテート力の不足、同僚の協力不足や理解不足などによる疲弊が増す可能性(中村ら, 2016)、訓練を受けたSPの活用は費用負担が大きく費用対効果を吟味し活用するなど、SPを教育に導入する際にも課題があり、分野関係なく共通の課題があることも予測できる。

A県内では、医学部の医療面接への参加や一部専門学校においてSPを活用しているといった雑誌記事があるが、SPを養成する組織は医学部以外にはない現状がある。今後対人サービスを基本とする保健医療福祉分野においてSPの活用は必要になると予測されるが、A県内の教員におけるSPの活用状況やニーズは不明である。

そこで本研究では、A県内の保健医療福祉分野における高等教育機関に所属する教育者に対して教育におけるSPの活用状況や活用に対するニーズについて明らかにすることとした。

II. 目的

A県内の保健医療福祉分野の教員におけるSPの教育活用に対する状況およびニーズの実態を明らかにする。

III. 意義

本研究の意義は、A県内の保健医療福祉分野高等教育機関の教員のSPに関するニーズを把握することにより、多分野で広く活躍できるためのSP養成に向けた手掛かりとなる資料とする。

IV. 用語の操作的定義

1. 保健医療福祉分野

本研究において保健医療福祉分野とは、医師・看護職・薬剤師・介護職・理学療法士・作業療法士・言

語聴覚士・視能訓練士・社会福祉士・診療放射線技師・歯科衛生士・管理栄養士・臨床心理士・マッサージ師等の資格職を養成している分野を指す。

2. 模擬患者 (Simulated Patient ; SP)

模擬患者 (SP) とは、ある疾患の患者の持つあらゆる特徴を可能な限り模擬するよう特訓を受けた健康人 (大滝, 1993) を指す。

V. 方法

1. 調査対象

A 県内における保健医療福祉分野の基礎教育機関 19 専門分野 (5 大学・1 短期大学の 11 専門分野, 8 専門学校 8 専門分野) に専任教員として在籍しており、専門科目の中でも演習科目を担当している教員とした。

2. 調査期間

2023 年 1 月～2 月

3. 調査内容

1) 基本属性

教育実務経験年数、最終学歴、養成している職種、看護職を養成している場合は、主な担当科目領域とした。

2) SP の教育活用状況

SP の認知の有無、在籍している機関における SP の活用実績の有無、SP の活用実績が有る者に対しては、SP が参加した演習場面、SP 以外の患者役を活用している場合は SP 以外の患者役 (教員・職員・学生・一般人)、SP への教育活用の希望について調査した。尚、調査は、アンケート前に SP に関する定義を記載し、SP に関する共通理解をした上で質問について回答を求めた。

3) SP を活用する場合の演習内容と求める能力

SP をどのような演習内容で活用が可能なか保健医療福祉分野における主な演習場面である「ロールプレイ」「接遇やコミュニケーションを学ぶ場面」等の 7 項目について複数回答を求めた。

さらに SP を活用する場合に求める能力において「演じる患者の設定への理解」「リアリティある演技」など 5 項目について複数回答を求めた。

4) SP の活用における利点と課題

SP の活用実績がある者に対して、SP を活用した科目の実施における教育の利点、学生への効果や教育活用における課題を自由記載で調査した。

4. 調査手順

調査は、A 県内の保健医療福祉分野に携わる職種を養成している高等教育機関の施設代表者 (複数の職種を養成している場合はその科や学部の長) に研究の目的や方法、対象者への配布の依頼を記載した説明文と、対象者への研究の目的や方法 (Google Forms の QR コード) を記載した説明文を同封し郵送した。その後、組織の責任者の研究協力が得られた場合、対象者へ説明文を配布してもらった。

研究対象者には、配布された説明文により同意が得られた場合、QR コードを読み込んでもらった。Google Forms では、調査項目の前に再度説明文を記載するとともに、研究参加の同意を求め、得られた場合に調査内容に回答できるよう設定した。調査は、無記名式で回答者のメールアドレス等個人が特定されないように設定した。

5. 分析方法

基本属性、SP 教育活用状況とニーズについては全体を単純集計した。その後、SP 活用経験、SP の認知の有無、SP 活用ニーズについて看護学分野と看護学以外の分野の 2 群に分け関連性については、Fisher の正確確率検定を用いた。尚、有意水準は $p = 0.05$ とした。統計は、分析ソフト SPSS Ver.26 を使用した。また、活用実績がある場合における効果や課題は自由記載内容をまとめた。

6. 倫理的配慮

本調査は、研究者の所属組織の倫理審査委員会に提出し承認を得たのちに実施した (2022 - 23)。対象者への調査参加については、自由意思の尊重、守秘義務の遂行、結果の公表、個人の特定化を避ける旨を説明文に明記した上で、研究の趣旨、内容に関する説明を Google Forms 内でも再度記載し、同意を得た。Google Forms の設定では個人が特定されるような情報を収集できないよう設定した。また調査は参加・不参加は任意であり、個人情報特定されないように処理すること、調査によって得られたデータは本研究や養成プログラム以外では使用しないことを十分に明記した。同意説明文書を研究対象者に

渡し、文書による十分な説明を行い、研究対象者の自由意思による同意を文書で得た。

VI. 結果

1. 対象者および基本属性 (表1)

アンケートは、A県内の19の保健医療福祉分野450名分を発送し、回答があった45名を研究対象者とした。対象者の属性は、教員としての実務経験は3年以上10年未満が15名(33.3%)と最も多く、最終学歴は、大学院(修士)が18名(40%)であった。養成している職種は、看護職が38名(84.4%)であり、次いで医師3名(6.7%)であった。看護職を養成している者の主な担当科目の領域は、成人看護学領域が9名(23.7%)と一番多く、次に基礎看護学領域8名(21.1%)であった。

2. SPの教育活用状況 (表2・表3・表4)

「SPを知っている」と回答した者は、31名(68.9%)であり、看護学分野では28名(73.7%)、看護学以外の分野では3名(42.9%)でありすべて医師であった。

SPの活用経験は、「SPを教育で活用している(活用したことがある)」と回答した者は、全体で6名(13.3%)であり、内訳は看護学分野3名(7.9%)、医学分野3名(42.9%)であった(表2)。

SPの活用場面は、看護学分野では2名(66.7%)

表1. 基本属性

項目	選択	人数	%
n=45			
経験年数			
	3年未満	6	13.3
	3年~10年	15	33.3
	11年~19年	13	28.9
	20年~29年	7	15.6
	30年以上	4	8.9
最終学歴			
	専門学校	4	8.9
	大学	8	17.8
	大学院(修士)	18	40.0
	大学院(博士)	15	33.3
資格			
	看護職	38	84.4
	医師	3	6.7
	介護職	1	2.2
	作業療法士	1	2.2
	社会福祉士	0	0.0
	栄養士	2	4.4
基礎教育分野			
	看護学分野	38	84.4
	看護学以外の分野	7	15.6
看護職を養成している者の主な担当科目の領域			
	基礎看護学	8	17.8
	成人看護学	9	20.0
	小児看護学	2	4.4
	母性看護学	4	8.9
	精神看護学	5	11.1
	地域・在宅看護学	3	6.7
	老年看護学	3	6.7
	看護の統合と実践	3	6.7
	未回答	1	2.2

が「ロールプレイ」での実施であった。医学分野では3名(100%)が「OSCE」と回答した(表3)。

「SP以外の患者役を教育で活用している」と回答した者は、全体で21名(46.7%)であり、看護学分野においては18名(47.4%)、看護学以外の分野では3名(42.9%)であった(表2・4)。そして、「SP以外の患者役を教育で活用している」と回答した者が活用している患者役は、「教員」が患者役になっている場合17名(81.0%)、「学生」が患者役になっている場合13名(61.9%)であった。SPの教育活用状況の看護学分野と看護学以外の分野の分野別の比較では、有意差はなかった(表4)。

SP以外の患者役を教育で活用している者のSPの活用希望は、「SPをすぐに活用したい」3名(13.6%)、「今後活用を検討したい」7名(31.8%)であり、計10名はすべて看護学分野であった(表4)。

3. SPを活用する演習内容と求める能力 (表5)

どのような演習内容でSPを活用可能かについては、全体では「ロールプレイ」が33名(73.3%)と最も多く、次に「接遇やコミュニケーションを学ぶ場面」が28名(62.2%)、「技術習得」が25名(55.6%)、「デモンストレーション」が23名(51.1%)であった。特に看護学分野は「ロールプレイ」でSPを活用したいと回答した人の割合が高く(p<.05)、看護学以外の分野では「デモンストレーション」「OSCE」が各4名(57.1%)と高かった。SPに求める能力は、「演じる患者さんの設定への理解」が39名(86.7%)と最も多く、次に「患者役として感じたありのままを学生に返答(フィードバック)する能力」36名(80.0%)、「科目の目的や目標など教育への理解」31名(68.9%)、「リアリティのある演技」28名(62.2%)であった。分野別においては、看護学分野は「患者役として感じたありのままを学生に返答(フィードバック)する能力」と回答した割合が看護学分野以外の分野に比べて有意に高かった。

4. SPの活用における利点と課題 (表6)

SPを活用した教育の利点として、「臨場感がある」「実践能力の評価ができる」などの記載があった。また、学生への効果については、「緊張感がでる」「SPと対面することで、患者像にリアリティがもて、イメージしやすくなる」などの記載があった。教育活用における課題については、「SP数の不足」「時間的、人員確保や経費の確保」「その人そのものを感じて、

表 2. SP の教育活用状況

項目	選択	全体 (n=45)		看護学分野 (n=38)		看護学以外の分野 (n=7)		P値
		人数	%	人数	%	人数	%	
SPの認知								
	知っている	31	68.9	28	73.7	3	42.9	0.19
	知らない	13	28.9	9	23.7	4	57.1	
	未回答	1	2.2	1	2.6	0	0	
SP活用経験								
	SPを教育で活用している(したことがある)	6	13.3	3	7.9	3	42.9	0.10
	SP以外の患者役を教育で活用している	21	46.7	18	47.4	3	42.9	
	患者役は活用していない	17	37.8	16	42.1	1	14.3	
	未回答	1	2.2	1	2.6	0	0	

*P<.05 Fisher の正確確率検定

表 3. SP を教育で活用したことある者の SP の活用場面

項目	全体 (n=6)		看護学分野 (n=3)		看護学以外の分野 (n=3)		P値
	人数	%	人数	%	人数	%	
ロールプレイ	2	33.3	2	66.7	0	0	
接遇やコミュニケーションを学ぶ場面	1	16.7	1	33.3	0	0	
技術習得	1	16.7	1	33.3	0	0	
デモンストレーションの患者役	1	16.7	1	33.3	0	0	
技術試験	1	16.7	1	33.3	0	0	
OSCE	3	50.0	0	0	3	100	
面接や診察	1	16.7	1	33.3	0	0	

*P<.05 Fisher の正確確率検定

表 4. SP 以外の患者役を活用している者の患者役と SP 活用希望

項目	選択	人数	%	人数	%	人数	%	P値
SP以外の患者役を教育で活用している場合の患者役(複数回答)								
		全体 (n=21)		看護学分野 (n=18)		看護学以外の分野 (n=3)		
	教員	17	81.0	15	83.3	2	66.7	1.00
	職員	5	23.8	5	27.8	0	0.0	1.00
	学生	13	61.9	12	66.7	1	33.3	1.00
	一般人	2	9.5	2	11.1	0	0.0	1.00
SP以外の患者役および未回答の者でSPの教育活用希望								
		全体 (n=22)		看護学分野 (n=19)		看護学以外の分野 (n=3)		
	SPをすぐに活用したい	3	13.6	3	15.8	0	0	0.25
	今後活用を検討したい	7	31.8	7	36.8	0	0	
	興味はある	11	50.0	9	47.4	2	66.7	
	興味はないし、活用したいとは思わない	1	4.5	0	0.0	1	33.3	

*P<.05 Fisher の正確確率検定

なりきることができるか」などの記載があった。

VII. 考察

1. SP の教育活用状況とニーズの特徴

本研究の結果より、SP の活用状況は看護学分野で 7.9%であった。中村ら (2016) の研究における全国調査では 36.4%が活用していることから、低値であることが明らかとなった。また、本研究は A 県内の保健医療福祉分野の高等教育機関の教員に配布した

が回答者は配布数の 1 割と低く、特に看護学分野以外の教員の回答率が極めて低かった。A 県では、SP の活用は医学部の医療面接や専門学校での演習にとどまっており、その報告は少ない。さらに、SP を養成する組織は医学分野にはあるが、OSCE に対応するための Standardized Patient (以下、標準 SP) の養成が主である。現状としては、A 県内において SP 養成組織がない地域特性が、回答率の低さや SP の教育活用の低さに影響していると考えられる。

表 5. SP を活用する演習内容と求める能力

項目	選択	全体 (n=45)		看護学分野 (n=38)		看護学以外の分野 (n=7)		P値
		人数	%	人数	%	人数	%	
SP活用可能場面(複数回答)								
	ロールプレイ	33	73.3	31	81.6	2	28.6	0.01*
	接遇やコミュニケーションを学ぶ場面	28	62.2	25	65.8	3	42.9	0.40
	技術習得	25	55.6	22	57.9	3	42.9	0.68
	デモンストレーションの患者役	23	51.1	19	50.0	4	57.1	1.00
	技術試験	17	37.8	14	36.8	3	42.9	1.00
	OSCE	17	37.8	13	34.2	4	57.1	0.40
	面接や診察	14	31.1	11	28.9	3	42.9	0.66
SPIに求める能力(複数回答)								
	演じる患者の設定への理解	39	86.7	32	84.2	7	100	0.57
	患者役として感じたありのままを学生に 返答(フィードバック)する能力	36	80.0	34	89.5	2	28.6	0.01*
	科目の目的や目標など教育への理解	31	68.9	27	71.1	4	57.1	0.66
	リアリティある演技	28	62.2	26	68.4	2	28.6	0.09
	学生のレディネスへの理解	17	37.8	16	42.1	1	14.3	0.23

*P<.05 Fisherの正確確率検定

表 6. SP の活用における利点と課題

自由記載内容	n=6
SPを活用した教育の利点	
臨場感がある	
OSCEではSPの協力が必須	
実践能力の評価ができる	
学生が、臨床に近い緊張感をもてることから、真剣に誠実に取り組める	
シミュレータでは再現できないコミュニケーションや反応	
SPを活用した教育における学生への効果	
効果は高い	
緊張感がでる	
SPと対面することで、患者像にリアリティがもて、イメージしやすくなる	
より実践的に対応できる。	
SPを活用した教育における課題	
SP数の不足	
候補者不足	
観察者、リフレクションを含め、学生は少人数で行ったほうが効果的であると思う	
ため時間的、人員確保や経費の確保が課題になる	
SPを利用した教育の目的にもよりますが、SPには、表面的に患者の言動をまねるのではなく、疾患の影響やどんな人生を乗り越えてきた人なのか、その人そのものを感じて、なりきることができるかが、求められると思います	
養成、マンパワー不足、お金不足	

その中で SP を活用する場合の演習内容と求める能力において、SP に対して職種によって異なるニーズがあることが示された。看護学分野では、SP の活用可能場面として「ロールプレイ」が他分野と比較し有意に高かった。看護学分野は、専門職を目指す学生が講義等によって学んだ専門的な技術を如何に臨床場面で発揮できるかが重要である。そのため SP に対して技術獲得のための練習相手ではなく、援助的関係形成を基盤とする看護専門職の在り方としての能力向上を意図としたことが他分野に比べて高くなった理由と考えられる。また、看護学分野では、SP に求める能力としては「フィードバック」が他分野と比較し有意に高かった。看護学分野においては、SP を活用した教育効果として、学習の内的動機づけや自己課題の明確化をあげている（渡邊ら、2016）。演習の中で学生に看護実践において核となる対象理解や援助的関係形成能力向上の契機としての SP の活用を求めているため、設定への理解や感じたありのままを返すフィードバックへのニーズが高かったと考える。このため現状として A 県内では医学部が活用している SP はいるが、看護学分野の SP 活用について医学で養成している SP を安易に転用することは最適とは言えない。看護学分野においては、人々を理解する力や人々中心のケアを実践する力といった看護実践能力（松谷ら、2010）向上のための演習目的に対応できる SP を養成することが重要であると考えられる。

2. 充実した教育実現のための SP の活用の可能性と課題

対人サービスを基本とする保健医療福祉分野の学生の実践能力向上にむけた教育の充実においては、SP の活用は有用である（福間ら、2006；渡邊ら、2016）とされているが、A 県においてはまず SP の存在や教育効果を教員が理解できるよう周知して行くことが必要とされる。また、2023 年には医学において共用試験が公的化される（公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構、2023）。標準 SP のニーズは高まり、さらに共用試験は歯学薬学などの他分野において導入が検討されており、様々な分野においても SP の存在が教育に必要になってくる。看護学や医学だけでなく多分野の教育ニーズに対応できる SP、もしくは分野を越境できる能力を獲得した SP を養成し、活用できる SP 養成組織が求められる。

しかしながら、短絡的に SP を養成すればよいと

いう安易な行動はできない。本研究結果より教育活用において、人員や経費の確保などの課題があげられていた。これは SP 養成には、費用負担や SP 養成に関するマンパワー不足、さらに養成する大変さなどがある（中村ら、2016）といった先行研究と同様であった。単体の教育機関や自助的な組織では、SP を養成し教育活用促進していくためには限界があるため、持続可能な SP 養成など運営において工夫が必要であると考えられる。現在、A 県内では、地域を支える人材育成やイノベーションの進展に寄与するとともに、地域の発展に資するような大学連携事例もある（文部科学省、2020）。地域ニーズや地域資源を基に保健医療福祉分野の教育組織が、養成した SP を共同で教育活用できるようなシステムにより新たな人材育成の契機として SP 養成組織の立ち上げが必要ではないかと考える。

3. 研究の限界と課題

本研究は、対象者 45 名と少数であることや、看護学分野の割合が多く結果に影響している可能性がある。また、SP に興味のある方が回答されている選択バイアスが生じ結果に影響している可能性もある。今後は看護学や医学以外の保健医療福祉分野の教育における SP に関する教育の活用ニーズについて調査し、より様々な分野のニーズに対応できる SP の養成に活かしていくことが課題である。

尚、本研究における利益相反（COI）は存在しない。

VIII. 結論

本研究は、A 県内保健医療福祉分野の教員における模擬患者の教育活用に対する状況およびニーズの実態を明らかにするために、Web によるアンケート調査を実施した。その結果は以下の通りである。

SP を知っていると回答した者は、31 名（68.9%）、教育活用経験は 6 名（13.3%）で内訳は看護学において 2 名が「ロールプレイ」、医学において 3 名が「OSCE」であった。SP 以外の患者役を用いている者は 21 名（46.7%）、その中で SP を活用・検討希望している者は 10 名（45.4%）であった。

SP を活用する場合の演習内容と求める能力においては、全体では「ロールプレイ」や「接遇・コミュニケーションを学ぶ場面」が高かった。さらに看護学分野において、場面では「ロールプレイ」、能力では「フィードバック」が看護学以外の分野に比べ有意に高かった（ $p < .05$ ）。

以上の結果を基に今後 A 県において SP を養成する上では、SP の周知と本研究結果を活かしつつ、さらに各分野のニーズの詳細を明らかにし多分野で活躍できる SP を養成すること、さらに地域の複数の教育機関で SP を活用できる養成・派遣組織が必要であることが示唆された。

【文献】

- 福間美紀,津本優子,内田宏美 (2006):看護基礎教育における模擬患者を導入した看護過程の教育効果とその課題,島根大学医学部紀要,29 (1) ,15-21.
- 長谷由紀子,中岡美由紀,今福輪太郎ら (2021):SP 参加型研修から歯科衛生士は何を学び,臨床現場でどう活かしたか,医学教育,52 (4) ,319-324.
- 池森康裕,高橋由紀,志水朱ら (2018):介護福祉学教育における修得度評価作成の試み,北海道医療大学看護福祉学部紀要,25,45-51.
- 喜田呂樹 (2008):テキストマイニング入門:経営研究での活用法,白桃書房,東京都.
- 公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構 (2023) 医学生共用試験要綱,chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mhlw.go.jp/content/10803000/001024161.pdf (最終アクセス 2023 年 6 月 1 日)
- 厚生労働省 (2020) 新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例,https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html (最終アクセス 2023 年 6 月 1 日)
- 松谷美和子,三浦友理子,平林優子他 (2010):看護実践能力:概念,構造,および評価,聖路加看護学会誌,14 (2) ,18-28.
- 卷康弘,川勾亜紀奈,福間麻紀ら (2014):相談援助実習における OSCE(客観的臨床能力試験)の開発:実施結果と学生アンケート調査から,北海道医療大学看護福祉学部紀要,21,1-11.
- 文部科学省 (2017):看護学教育モデル・コア・カリキュラム~「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標~,大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会,https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (最終アクセス 2023 年 6 月 1 日)
- 文部科学省 (2020):地方創生に資する魅力ある地方大学の実現に向けた検討会議,chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/content/20210113-koutou01-1422495_00009_012.pdf (最終アクセス 2023 年 6 月 1 日)
- 文部科学省 (2019):大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告,大学における看護系人材養成の充実に向けた保健師助産師看護師学校養成所指定規則の適用に関する課題と対応 策,https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt_igaku-000003663_1.pdf (最終アクセス 2023 年 6 月 1 日)
- 中村もとゑ,山崎歩,渡邊聡美 (2016):看護系大学における模擬患者の養成および活用の現状と課題,日本赤十字広島看護大学紀要,16 (1) ,29-38.
- 日本看護系大学協議会 (2018):看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標,https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf (最終アクセス 2023 年 6 月 1 日)
- 大滝純司 (1993):模擬患者を使った面接技法 日本での試み 日本の看護教育への模擬患者導入 の意義,看護展望,18 (8) ,897 - 899.
- 佐藤香苗,山部秀子,川上貴代ら (2011):管理栄養士養成課程の「栄養教育演習」における 客観的臨床能力試験導入の試み,高等教育ジャーナル:高等教育と生涯学習,18,125-140.
- 佐藤仁 (2008):模擬患者を導入した授業の試み,理学療法科学,23 (1) ,115-119.
- 茂野香おる (2021):系統看護学講座専門分野 I 基礎看護学 [1] 看護学概論,P147,医学書院,東京都.
- 清水裕子,横井郁子,豊田省子他 (2008):看護教育における模擬患者 (SP,Simulated Patient・Standardized Patient) に関する研究の特徴,日本保健科学学会誌,10 (4) ,215-223.
- 志村俊郎,吉井文均,吉村明修他 (2012):模擬患者・標準模擬患者 (SP) 養成のカリキュラム,医学教育,43 (1) ,33-36.
- 植村研一 (1998):Simulated Patient,医学教育,19,218-221.
- 渡邊聡美,山崎歩,中村もとゑ (2016):看護基礎教育における模擬患者参加型教育の教育効果と課題 - 教員の視点から -,日本赤十字広島看護大学紀要,16 (1) ,21-28.

Exploring the Educational Usage and Requirements of Simulated Patients by Health and Human Services Educators in Prefecture A

SHINDOU Yuji, SOHDE Harumi, HONMA Takayuki, YAMAMOTO Nao,
HAGA Ryo

key words: Simulated Patients, Use in Education, Requirements, Human Services